ふじみの

No. 30

東京農大畜友会

巻頭言

畜産学科長　渡　邊　誠　喜

いつものことながら、春の息吹きと共に卒業年次生の真剣な眼差と敏捷な行動とが見受けられ、再びこの頁を埋る時期の訪れを知らされる訳であるが、この春の畜産学科卒業生は一六〇名であり、ご卒業誠にお目出度く、心よりお祝い申します。大方の卒業生は、これを以って学窓での勉学、教育を受ける、と云うことに終止符を打たれる訳であるが、今や人生、生涯教育であり、むしろ、これからの教育こそが「眞」のものと思われる。

地球上における食糧事情を見る時、極めて偏重した食糧の過不足が存在し、飽食、美食あるいはグルメと騒いでいる一方では、飢餓に瀕している人々が大勢居る訳で、誠に心痛むものである。我々、食糧生産に直接的に、あるいは間接的に

関与する者として旺いに思考を重ねなければならない点であろう。

これからの畜産人は、常に国際感覚あふれた広い視野と、深い専門的知識と、更には専門的知識のみに囚われない学問的見識とを有しなければならない。言うまでもなく、我が国の畜産業の発展と維持は、深化された畜産技術の活用のみでなしうるものでは決してない。世界経済、地球上の農産物の多寡、引いては地球上の気候の変化、などなど、諸々のファクターについての分析能力を有することが必定である。換言すれば、この様な能力を有する人物こそ、眞の畜産人たる者と信ずる。

眞の畜産人よ!! 自信と誇とを以て邁進されん事を祈ります。

平成三年二月吉日

ふじみの発刊にあたり

畜産学科三年　広　田　武　司

もうすっかり平成という言葉が耳になじんだ今日、「ふじみの」の記念すべき三十号を発刊することになりました。

さて、本誌は畜産学科の先生方、学生達の原稿を記載すると共に、昨年一年間の事業報告、決算報告などを記載しています。一人一人が、一生懸命書いた文章ばかりなので、みなさん最初から最後までしっかりと読んで下さい。

ふじみの目次

第30号

巻頭言

ふじみの発刊にあたり　渡邉　誠喜　1

御一報

「ロンボク（Lonbok）」への旅　教授　一戸　健司　6

科学技術とことばの壁　教授　杉村敬一郎　12

畜産業の前途　教授　新井　肇　14

同窓会だより

同窓会長あいさつ　会長　伊藤　澄麿　16

畜産学科同窓会よりごあいさつ　総務　近江　弘明　17

集う学友

Artificial Insemination　四年　吉兼　由美　18

原稿を依頼したH君へ　三年　明石　園子　19

一年を終えて　一年　三沢　英希　20

研究室だより

畜産物利用研究室　22

畜産経営学研究室　24

家畜生理学研究室　27

家畜飼養学研究室　28

家畜育種学研究室　30

家畜衛生学研究室　32

家畜繁殖学研究室　34

収穫祭だより

収穫祭を終えて　三年　廣田　武司　37

始めの一歩　三年　横井　厳　38

一枚のコイン　三年　保科　幸広　39

我が大学生活の大切な1コマ……体育祭　三年　橋本　裕樹　42

「―畜産魂―家畜苑」　三年　原川　竜也　43

北門装飾を終えて　三年　水島　正人　46

第98回収穫祭役員　47

第98回収穫祭結果報告　48

第98回収穫祭畜産学科統一本部決算報告　49

第20回学内スポーツ大会結果報告　53

平成三年度畜友会事業計画　54

畜友会規約　55

編集後記　58

畜友会だより

平成三年度定期総会報告　50

平成三年度畜友会役員名　50

平成二年度畜友会決算報告　51

平成二年度畜友会事業報告　52

御一報

「ロンボク(Lonbok)」への旅

一戸健司

ロンボク島と言っても知らない人が多いと思う。但し、バリ島の隣りの島だと言うとそのロケイションは見当がつくであろう。ところが、幸か不幸か私にとってはこの「ロンボク」と言う名称が不思議と子供の頃から脳裏に深く刻み込まれて来た。当時私は野生動物、とりわけ鳥類に人一倍興味を持っていたため、動植物の生態系の点からロンボク海峡とマカッサル海峡を結んだライン、即ちウオレス線で西側のアジア系生物相と東側のオーストラリア系生物層に分けられると言う事を覚えていたからである。それ以来、私はこのウオレス線の東側に位置するロンボク島は、一面ジャングルで覆われ、ここに熱帯にのみ生棲する鳥類が飛び交い、未開の民族が生活しているとのみ思い続けて来た。

A. 出発に際し

私達が一昨年当時本学に留学中であったMs. Retno Murwaniの紹介で素晴らしいスマトラ島のトバ湖の旅を終え、さて来年は何処にしようかと相談していたところ、留学を終え帰国間際のRetnoから「次はロンボクにお行きなさい。私の父はメダンに赴任する前にロンボクにいたのだから」と言ってくれた。そこで第一の取っ掛りは出来た。その後インドネシアに帰国後の彼女と何回か文通をし、現地の方を紹介していただいた迄はよかったが、こちらの方は当方から何回手紙を出しても全く梨のつぶてである。その内彼女の御両親がわざわざロンボク迄行ってくださったときやや安心した。そんな折に一昨年私がボゴールで世話になった「インドネシア国立畜産試験場」のDr. Setiokoから急に国際会議で東京に行く事がきまったので会いたいとの話が来た。彼の帰国前鎌倉見物の帰途拙宅に見えた際ロンボク行の話しをしたところ、この島の州都マタラムの国立マタラム大学には、彼のガジャマダ大学時代の同級生Mr. IR. Hasyimが畜産学科長をしているから紹介状を書いてあげる。講演をするならばその演題を至急知らして欲しいと言い残して帰国した。国立大学迄ある島、それもバリ島とほぼ同面積、人口もバリ島並みとの話しに又びっくりした。どうやらロンボク島は私の抱いて来たイメージとは可成り異なっている様だ。

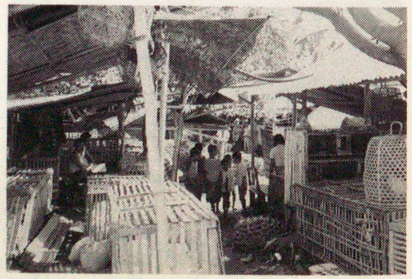
さていよいよエイジェントを通じ、切符を購入する段階になって又一つの障害に直面した。先ずロンボクに渡るにはバリで一泊して、翌日メルパティ航空でロンボク海峡を渡るわけだが、このメルパティの券がどうしても

日本で入手出来ない事である。止むなく不明のまま出発を余儀なくされた。

B. バリからロンボクへ

バリでは空港に近いクタビーチホテルに一泊した。マタラム空港の出迎えを一応14時と先方にお願いしてある都合上、一先ず予備調査の積りでタクシーを頼み、8時にメルパティ航空の事務所に行く。そこですべてが判明した。この航空会社では予約は一切しない。切符は離陸の一時間前から順番で購入する。これでは日本で購入出来ないのも当然である。止むなく一応ホテルに戻り、再度空港に行き、11時の便でロンボクに。さて到着したのはよいが右も左もわからない。次の便だと30分の遅刻となるためこの便にしたのだが、英語も空港の職員以外先ず駄目となるとただ待つのみ。30分も待ったろうか、同行のO君が私に何か話しがあると言うインドネシア人を連れて来た。この人は日本語で「私は今日デンパサールから来る日本人のグループを待っているが、それはあなた達か」と言う。何んだか妙な錯覚にとらわれていると、その内大学の職員がどやどやとやって来て私に挨拶した。然しここでも驚いた事に、その内の一人は日本に一年半技術の研修に行っていたとかで流暢に日本語を操り、他の職員はオーストラリアに留学したと言う一人を除き、あまり上手とは言えない英語で我々に対応した。

彼等の案内でガイドブックにもある著名な「バードマーケット」に行く。確かに緑襟野鶏をはじめとして多くの熱帯産の鳥類を目瞭したが、ジャカルタの所謂ペットバードを中心にしたマーケットよりもローカル色が強く、七面鳥、バリケン、アヒル、鳩類が散見された。私達がロンボクでの第一夜を過したグラナダホテルは庭園も美しく交通の便もよいが、何分にもタクシーと名のつくものは空港以外では殆んど見られず、島内の移動は殆んどがドツカル（馬車）となると、言葉が通じない事もあり可成りの不安要因を含んでいる様に思われた。



ローカル色豊かなバードマーケット

C. マタラム大学での講演

8時に大学からの迎えが来た。私は勿論、同行したO、H両名はそれぞれ各自の原稿とスライドを持参して大学に向う。ここでこの講演をきくため昨日ジャワ島のスマランからかけつけたRetnoと会う。

さて講演はO君、H君、小生の順で左記の論題で8時50分～12時10分迄の3時間半、活発な討論を交え実施した。

a. Measurement of the excreted Steroid in feces of Birds.
b. Ecological observations of the hybrids between Ceylon Jungle Fowl and Native Japanese Breed of Chicken Gifujidori.
c. Introduction of Native Japanese Breed of Chickens

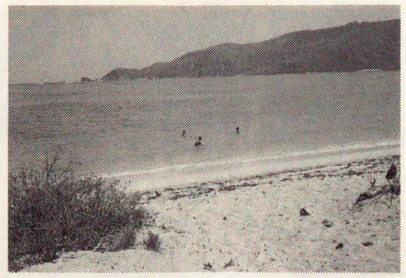
とりわけOの行ったa報告では議論が百出し、当初は英語でボチボチと言う感じであったが、その内インドネシア語でどんどん話しが進み、Retnorはこれを英語にしたり、日本語にしたりの大活躍であった。一時間にも及ぶ質疑のため最後にはOはしゃがみ込んでしまった。いささか薬がききすぎた感じ。

マターラン大学での講演を終えて

D. ササック族の村をたずねて

講演も終り、次の宿泊地スラナデイホテルへの道すがら、ササック族集落のあるランビタンを訪れた。道路のよく整備されたマタラム市を出ると、最初は何の変哲もないタバコやいも畑が続いていたが、突然赤茶けた岩山の上にお椀をふせた様な丸い屋根を持った小屋が出現した。その赤茶けた岩肌とともに何かかさかさした、異様な光景であった。幸い同行したMr. Subadho（かつてRetnorの父Mr. Soewonoが当州の教育庁の長官であった時その直属の部下であった方で、目下四つある部署の一つの長であるとの事）の案内で彼等の手製の織物を購入するために訪れたが、土間の上にゴザを敷き、その上に一方では病人が横たわり、他方では主婦が自分の身体を心棒にして足を前に投げ出し、座ったままパタン、パタンと機を織っている。中央で家長と思われる老人が紙煙草をつめている。娘は13、14才に達すと結婚して子供を生む風習があるため、若い母親の姿が多く見られた。若い娘が歌ってくれた民謡には哀愁がただよい、遠くビルマから流れて来たとされる彼等の祖先が歩んだ道のけわしさを物語っている様であった。

ササック族の村ランビタンから山越えをし、車で20分位行ったところにクタビーチと言う百mにもわたり白砂が続く閑静な海岸がある。先ずここ迄来る日本人は少なく、欧米、オーストラリアの人達の姿が散見される。底迄透明なビーチと言う事で、水泳の得意なHは勿論、OもS氏も海の中に。私は海岸に設置された傘型の屋根の下で荷物の番をしていると、あちらこちらから小さな織物を手にした女や子供が集まって来た。さて私達が会食しているとその数は遂に25 or 26人に達し、これらの観衆は固唾をのんで私達の一挙手、一投足を見守っている。Hは初めは彼らに歯ブラシや菓子を分配し彼等も黙してそれらを受取っていたが、最後に残りを誰れからも平等にとれる様中央部にポンとセットしたとたん、これらをまるで飢えた野獣の如く、母親ともども小さな子供達迄奪い合う姿は、ただ彼等の生命に対する執念を如実に現している様に思われた。教育も受けられず貧苦に直面している彼等に接するに際しては、それなりに心構えをする必要性を痛感した。



美しい石砂のクタビーチ

E. 国営スラナデイホテルへ

クタビーチを後にし、泉の湧く高台のスラナデイホテルに到着した。その湧き水を利用したプールの底には玉砂利が敷きつめられ、水は冷たく澄んで気持がよい。このプールを囲みコテージタイプの客室が熱帯樹の間に散在する。ここに来て初めて私が夢に描いていたロンボク島が出現した。HとOは早速海水パンツに着替え水の中に飛び込んだ。私も恐る恐る入水したもののあまりの冷たさに思わず「ぞーと」する。まさに心臓麻痺でも起こりそうな感じ。これを見ていた日光浴中のドイツ人の若い夫婦が「Temperature is about 18°C」と言った。

このホテルの従業員は極めて親切な上、宿泊料は一泊一室3,000円と言う安さである。ホテルに隣接したスラナデイ寺院の裏は巨大な樹木がうっそうと茂る森となって居り、野生の猿が多数徘徊していた。私は子供の頃から趣味としていた蝶の採集を、ボーイ長のMr. Weraに手伝ってもらい満喫した。清くすんだプールの上を数頭の「ナガサキアゲハ」が戯れながら渡る姿は印象的であった。

スラナデイホテルの中庭

このホテルの池には「巨大ウナギ」が飼われていた。確かに5mはあるであろう。隣りの寺院の庭には更に大なる物が神に捧げられていると言う。その料理法は「ぶつ切り」にして煮るときいたが、さぞかしまずかろうと推察した。

F．スラナデイからスンギギビーチに

ローカル色豊かなスラナデイを後にし、近年急速に開発が進められて来たスンギギビーチに到着。ここの中心はローカル色の全くないヨーロッパの雰囲気を漂わせているスンギギビーチホテルである。宿泊客は80％迄が白人で、他に少数の中国人、韓国人がいる程度。日本人に至っては我々3名以外、2 or 3名いたであろうか。全くヨーロッパの何処かのリゾート地でバカンスを楽しんでいる様な印象を受ける。私達はここを拠点として、「インドネシア政府教育庁が主催する難民に対するチャリティーショー」の見学に出掛ける。この試みは毎年インドネシアの何れかの州で実施され、本年はこのロンボクの属する西タサテンガラ州が当番に当っているとの事であった。

九月十一日の開会式に始まり、ショーのイベントは十二日。はるばるジャカルタから文部大臣をはじめ政府の高官並びに民間のスポンサーが大挙して訪れたこの試みだが、やはりこの国らしい雰囲気を多分に止めていた。先ず開会式は午前11時に始まる予定であったが、12時半に至っても始まる様子がない。その間式に参列する各校代表の生徒達は炎天下で帽子もかぶらずに待っている。式はやっと12時40分に始まり、大臣、同島の長官の挨拶等で13時20分終了。群れをなす聴衆は不平も言わず散って行く。理由はジャカルタからスラバヤ迄の航空便が遅れたためとの事。これが日本だったら何の説明もなくこう

スンギギビーチの日没

Hari Aksara International

待たされては一騒動あるに違いない。

十二日のイベントは、さすがに見るに値する。各地域を代表する民族衣装に着飾った代表達が、それぞれの民謡を歌い踊り、各地域の特産物を展示した会場とともに印象に残る物であった。私達日本人が珍しいためか、テレビ局の人達が私達をさかんに映していた。

スンギギビーチホテルの朝は美しい日の出と野鶏の鳴声で始まる。このホテルに隣接した民家では緑襟野鶏と地鶏とのF_1をペットバードとして飼育している。その鳴声が早朝ホテルに宿泊する私達の耳に届く。インドネ

シアではこの緑襟野鶏を森で捕獲して飼育した場合、雌は産卵せず殆んど子供がとれないと言われている。そこで彼等はこの緑襟野鶏の♂と地鶏の♀を人為的に交配し、その両親よりもはるかに大型化したF_1の♂を愛玩鶏として飼育する風習がある。インドネシア第二の都市スラバヤの北部に位置するマドウラ島では、このF_1作出を専業とする農家が多数存在するとの事であった。

G．ロンボクからバリへ

さてこのロンボクからバリへの旅は大変であった。例の島をあげてのイベントと多数の団体客（西ドイツとかきいたが）の帰路とも重なり、例の如き順番待ちでの切符の購入のため、10時半から16時迄延々5時間半待って、かろうじて最終便に乗りバリに向った。この場合現地の方々の御協力がなかったならば、更に一日ロンボクに滞在せざるを得なかったと思う。バリビーチホテルでのんびり一日を過し、無事日本に帰国した。

H．あとがき

この旅を通じつくづく感じたのは次の様な点である。先ずインドネシアと言うと日本人はバリ島とボルブドールのあるジョクジャカルタしか対象としない。それは何故だろうか。一昨年訪れたスマトラ島のトバ湖、それに今回のロンボク島の様に素晴らしい場所があるのに。

それはやはり言葉の問題だと極言出来よう。観光ずれしたバリやジョクジャの人々の中には日本語を話す者、又英語を話す者が可成り存在する。ところがトバ湖やロンボクとなると先ず英語もおぼつかない。そうなるとやはり不安に誤解が思わぬトラブルの原因となり、必然的に客の足も遠のくのではあるまいか。

科学技術とことばの壁

教授　杉村敬一郎

仕事で日本へ来て、会話を習い始めたドイツ人、或る日会社で誰かが遅れて来た時に、遅れたわけを話しているのを聞いて驚いた声で、家族で誰が病気ですかときいた。遅れたのは（交通の）渋滞だったけれど、ドイツ人は重体と云う言葉を憶えたところだったから。東京から鹿児島へ来た士族に鹿児島の士官が何をしに来たのかを聞いたとき、視察と云ったのを、士官は（隆盛を）刺殺に来たと聞いたので事件となり、それさえなければ西郷隆盛は死なないですんだという。そのドイツ人がイラク戦争に行く日本自衛官がなぜ火を消さなければならないのかときくから、小火器を持っていてよいかどうかの国会討論をきいたためだろうと思って、いろいろと説明したが、彼がもう勉強するのがイヤにならないように気をくばりながらものを云うのは僕の消化器にもこたえたものだ。ウチの記者が帰社しましたら汽車で貴社に伺わせますと云う例文はよく使われる。ウチの書き手がもどりましたら岡じょう汽であなたの舎に伺わせましょう。これは美しい日本語だなあ。僕らの研究発表でも、「前半の数値の減少から全般の現象を考えますと……」なんて云われても字を見ないと解らない。ニュースをきいてホーソー関係ではなんど云われても、ラジオの話か辯護士の話か荷づくりの話かはしばらく聞いていないとわからない。こんな苦情を云っていると、人々は「前後の関係で解る筈だ」と云う。でも、前後の関係で判断しなければならないような示し方はメディアとして成り立っていないではないか。日本で生れて以来、馴れているからまだしも、国外の人々にどれだけこなせるだろうか。

日本人はせっかちで、ファッシリティーを好むのだ。これが漢語の熟語をやすやすと使うようにさせたし、それより前に、オン読みにとびつかせたのではないか。ところが外国人はたくさんの母音を持っている。日本には五つしかない。を、ゐ、ゑなんかは死んでしまった。韓語やタイ語では母音が何十とあるときいた。だから、上に書いた発音の同じものも、日本語だから同じになってしまうのであって、彼らは之らを云い分け且つ聞き分けられるのではないだろうか。それにとびついたのがそもそもの間ちがいである。辞書をしらべて、かなで書いたとき同じになってしまうものがいくつかある時は、最もポピュラーなのを残して、あとはクン読みや、昔からのヤマトことばにもどして、これを人々が常々用いるように、次第に日本語を変えて行くしかないだろう。

素人の僕が気がつく程だから、専門家はとっくに問題にしていると思う。でも、文部省が専門家を集めて、策を考えはじめても、集められる専門家はもともと言葉の

人である。文盲ものの苦労なんかよく理解出来ないから、状況はますます悪くなる。では、官が音頭をとってやれば良いかと云えば、必ずしもそうではない。当用漢字などその例であった。今問題にしている事は当用漢字によって、かなで区別出来ないだけでなく、漢字で書いても区別出来なくなってしまわないか。

そもそも僕らは漢字を目で見て、内容を理解する。ためしてごらんなさい、一瞬で誰々君のことだと解って顔が浮かぶのは漢字を目で見たときでしょう。ローマ字やカタカナで郵便が来ると、それが自分自身宛であってすら三秒位かかりませんか。

母音が五つしかないという宿命はまだ他にもあります。VALLEY（谷）、BARLEY（大麦）、BALLET（踊りの）、VOLLEY（BALL）はかなで書けばどれもバレー。このかなで発音するから日本人の外国語はこの四つを全く区別出来ないわけです。これは母音だけの問題ではなくてVなども発音出来ないせいもあるでしょう。

留学生は日本語をやって来いと大学の先生たちはおっしゃる。たしかに日本の科学技術は欧米からだって留学する価値のあるものは沢山あると思われる。それにしては欧米からの留学者は少なすぎる。それはここで問題にした発音のことだけではなくて、文の構成の違いが大きいと思われる。アジア語相互だと、その点はちょっと別問題なのかも知れないけれど、英仏独西などとは余りにもちがっているし、日本語の使い方はあいまいだ。今もラジオのスイッチを入れたらニュースが聞こえた。「……の屍体が発見され、警察では殺人事件とみて……」。警察ではと云うのは三格で、主語ではないし、何を殺人事件とみたのか目的格もない。だから警察はこの事件を殺人とみなして……」と云えばそのまま西欧語になる。西欧人相互が外国語を学ぶのはナマリに毛がはえた程のちがいで、文の構成の原則は同じだから、何とか勉強しようと云う気になるだろう。日本へ留学しようとすると外国公館に文部省のアタシェがいて候補者の日本語を試験するそうだ。それにパスする域までがんばる人は、志を立てた人の何分の一だろうか。さっき云った発音のことと漢字の読み書き、文の構造のあいまいさの克服。これでペラペラになったら専門分野のこと以前にその日本語でメシが食えそうだ。

でも、先生たちや文部省は留学するんだから日本語をやれと平気でおっしゃる。一体どうやって候補者たちに日本語を教えるつもりなのか伺いたい。

畜産業の前途

新井　肇

今ほど、農業や畜産に逆風が吹いている時はない。日本の食糧自給率は先進国中最低、アメリカ農産物の最大の顧客となっているというのに、牛肉、オレンジが自由化され、米の市場開放が迫られる状況となって、外圧はとどまるところを知らない。

外ばかりか内側からも、自由化歓迎論や農業不要論等、農業いじめの論調が堂々とまかり通る時代となってしまった。

しかし、古来、農業を疎んじて国が栄えたためしがない。強国アメリカは世界最大級の農業国であり、ヨーロッパ各国は食糧自給率が軒並高く、先進国は日本だけが唯一の例外となっている。農を犠牲にして、工をたすける日本の政治は、輸出産業に偏重した日本経済の特異性を反映したもので、世界の大勢でもなんでもない。安ければよしとする農産物の輸入洪水は、いずれシッペ返しを受けるにちがいない。石油と食糧を同列視して、あるところから買うのは当り前とする議論は論外である。

農業が虐待される今の風潮は、歴史的にみても、世界的にみても、決して一般的、必然的なものではない。だいいち、人間が食べることをやめない限り「食い物産業」である農業がすたれるはずがない。現に、総体としての農産物需要は少しも減退しておらず、農業に対し、新しいもの、優れたものを求める声は年々高まっている。

問題は「農業いじめ」の風潮に肝心の生産者が悲観的になってしまったことである。卒業生の動向を見ても、「農業を継がない」という後継者や、「継がなくてもよい」という親が増加している。牛肉の自由化やコメ問題が連日新聞に出るようになって、一層拍車がかかったように思われてならない。

しかし、農業の前途と農家の前途を混同してはいないだろうか。たしかに、農家の実体は兼業化、脱農化を強めており、専業農家率は一五%を割っている。畜産農家の減少率はとくに高く、年率五～一〇%の割合で減少し、戸数は将来今の何分の一かになってしまうと思う。しかし産業規模は縮小していないので、生産者の数が減った分だけ一戸当りの飼育規模が増大して、企業的なしっかりした農家だけが残る時代となるといえよう。

とくにわが国の畜産は、土地離脱型あるいは加工業的と言われるように、濃厚飼料中心の飼養形態を特色としており、そのことが弱点として問題視されているが、逆に多頭化、企業化を促進した面があり、土地面積に制約されないである程度発展できる展望がひらけたともいえる。加工型畜産は稲作のような土地利用型農業とちがって規模に自由度があり、それだけ経営者能力がものをいう業種であるといえる。この結果、多数のやめてゆく農家と、少数の成功農家というコントラストの中で、業界が再編成されているのが実態である。自由化の影におびえて撤退者となるか、生き残って成功者となるかの、選択肢が多くの若者の目の前にある。

近頃、卒業生の結婚式に呼ばれる機会が増え、その度に驚くことがある。それはこの「ヨメ不足」がいわれるご時世に、ほとんどが農家以外から利口そうで美しい花嫁を迎えていることである。いずれも畜産農家で、それなりの経営をしており、新妻と一緒に牧場で働くことを前提にしての結婚である。いかにも農業が劣勢産業のように言われている時代だが、立派な経営、立派な青年には都会以上の幸せがくるという証拠である。

日本の畜産には飼料自給率が低いという、かなり決定的な泣き所がある。しかし、その高い生産性や品質によってエサを輸入しながら安い輸入畜産物に対抗して何とかやってきた実績がある。一頭羽当りの乳量、卵量、豚の繁殖成績などは驚異的でさえある。畜産物のコストや価格が高いのは農家の努力や能力が低いからではなく、飼料資源や土地面積に恵まれず、経営規模があまりにも小さいという経済的条件にある。

農産物の自由化は日本農業に大きなダメージを与えた一方、牛肉の自由化で経験したように意外な底力を見せて人々を驚かせた。それは和牛肉が少しも下がらず、消費者もそれを支持したことである。消費者の商品選別意識が強く、よいもの、安全なものにはある程度金を支払うという日本の風土の中で、畜産や園芸にはまだまだ外国に負けない生き方があると思う。

何れにしろ、自分の進路を、世間の風潮や平均的な見方に委ねるのではなく、自らの頭で具体的に考えて意思決定をし、決めたら自信をもってすすむ若者であって欲しいと思う。

同窓会だより

同窓会長あいさつ

畜産学科同窓会
会長　伊藤澄麿

畜産学科は、昭和二十八年に第一回の卒業生が世に出て以来、今日まで、すでに三十八回の卒業式が行われ、延四、三八九名の同窓生が、国の内外を問わず、畜産業界ならびに関連産業界においてそれぞれ活躍されております。

我々の畜産学科は、房総半島のほぼ中央に位置する文字通り草深い茂原の郷に呱々の声を挙げて以来、丁度、四十周年を記念し、昭和六十三年十一月二十五日、港区六本木の国際文化会館において、北は北海道、南は九州、沖縄の各地から畜産学科卒業生が一堂に会し、盛大に同学科設立総会が開催され、「東京農業大学農学部畜産学科同窓会」が発足致しました。

本会は、会員相互の親睦をはかり、併せて畜産学科の発展に寄与することを目的として設立され、その目的の達成のため毎年左記のような事業を行ない、三年目を迎えようとしております。

一、畜産学科（畜友会）への援助
二、新入会員、卒業祝賀会への援助
三、会員名簿追補発行
四、同窓会報の発行
五、総会および懇親会の開催
六、役員および常任幹事会の開催

ついては、準会員ともいうべき在学生諸君は、畜産学科を母とし、友となる「同窓会」を活用し、その恩恵を受けていただき幅広い人格を形成され、勉強（研究）ならびに課外活動に全力を投球し、悔のない学生生活を送って下さい。

畜産学科同窓会より
ごあいさつ

畜産学科同窓会総務　近江弘明

畜産学科同窓会の内容については、伊藤澄麿会長の挨拶文によって、すでに理解されたことと思いますので、この項では、平成二年度に行われた主な事業を紹介いたします。

一、平成二年八月三十一日　同窓会報の発刊

本会報は創刊号で、会長伊藤澄麿、校友会長武正総一郎、学校長松田藤四郎、畜産学科長渡邉誠喜の各先生方よりご挨拶が、加えて同窓会副会長向後明男、副会長山中良忠の両先生から特別寄稿があり、すこぶる充実した会報を発刊しました。

二、同年九月二十七日

約百名の会員が、本学グリーン・アカデミーの大ホールに参集し、第二回の同窓会総会並びに懇親会が開催されました。

前半の総会においては、活発な討論により次々と議題が消化され、また、後半の懇親会では、卒業年度の別なく（新旧）、学生時代の想い出話の花があちこちに咲いておりました。とても、和やかな一時でした。

三、第九十八回収穫祭に参加

前年度は、鳴面直径二尺一寸の和太鼓を収穫祭における上位成績の獲得等の願いをこめて、畜産学科（畜友会）へ寄贈しました。

平成二年度は、畜産学科のシンボル・マーク（牛頭）を染抜いた祝半てんを新調し、これを寄贈しております。

平成三年は、わが東京農業大学が創立百周年を迎える記念すべき年となります。この伝統ある学舎で、今、学ぶ者、その学舎を後にする者、そして、これから学ぶ者は、いずれも百一年からの農大を創造する作者になって頂きたく、今後とも、東京農業大学の発展のために勉学に研究に励んで下さい。

集う学友

Artificial Insemination

畜産生理学研究室四年　吉　兼　由　美

〝まるで、血圧を測定する時の腕帯で腕に空気圧がかけられている感じ〟これが牛の直腸検査実習で初めて牛の直腸に腕を入れたときに私のインパクトでした。私が人工受精（家畜人工受精）師の講習会を受講したのは、いずれ受精卵移植師の資格を取りたいという希望があったからですが、農大に入ったからには、畜産学科で学んでいるからにはぜひともこの機会に家畜人工受精の講習会を受講し、資格を取得したいと思っている後輩の方もたくさんおられることでしょう。

そこで家畜人工受精の講習会について簡単に述べることにします。まずその種類は牛と豚に分れており、期間は八月の約一カ月間にわたって開催されます。その内容は前半が本校での講義と実験、後半は農場での実験実習、そして最後に本校での総合試験（筆記・面接）があり、さらにセクション終了毎に筆記試験があります。

個人的な感想を述べますと、朝から講義、引き続き夕方まで実験、そして次の日はセクションテストというハードなスケジュール、さらには普段全くかかわりがない関係法の暗記、おまけに東京の八月の猛暑が拍車をかけて、もう頭がバーストしてしまいそうでした。

一方、富士農場での実験実習は美しく爽やかな自然が気分をリラックスさせてくれましたし、フィールドでの実習は、研究室が異なっていた為に今まで殆ど知りあう機会のなかった人達ともグループ実験等を通じて交流を深めることができ、四年間の大学生活の最後の良い思い出づくりにも役立ちました。最後の総合試験に臨むにあたっては、さすがに勉強しましたし、（なにぶん範囲がとても広いものですからけっこう大変です。）個人面接の時には妙に緊張してしまいました。

家畜人工受精の講習会を終えた今になって、確かに大変ではありましたが、この経験が自分にとってとても有意義なものであったと思っていますし、後輩の皆さんにも大いに講習会を受講してみることをお勧めします。

最後になりましたが、私は、この家畜人工受精講習で家畜人工受精という思想の起源が、十四世紀の昔にさかのぼった、アラビア人たちの伝説的挿話のなかに既に見られていたことを知り、畜産に新たな重みと、そしてより一層の魅力を感じました。

原稿を依頼したH君へ

畜産経営学研究室三年　明　石　園　子

渡米するに当たっての心がまえを、と言われ、とても困っている。アメリカに行って農業実習をしようと決めたのが、収穫祭の気分の盛り上がる夏休み明け。IFAA（INTERNATIONAL FARMERS AID ASSOSIATION）の試験を受けたのが、収穫祭準備真最中の10月末。私の得意な酔った勢いで……だったのである。（この場合、酒にではなく、雰囲気にではあるが。）

収穫祭の酔が覚めてきた頃、結果を知って、なっなんてことをしてしまったんだ……と我に返った。朝起きて、ここはどこ？　あなたはだれ？　ってな気分だった。しかしそんな私と関係なく、事は進んで行ったのである。まるでお腹が大きくなってゆくように……。心優しい友人達は「アメリカか。病気、うつしてくるなよ。」と心配してくれるし、（せめて逆を心配して欲しかった……。）アメリカでの貧乏生活を心配して、先輩方は、「オレ、お土産何がいいかなぁ。」なんて言って下さるし、もう後には引けない。産む、いや、行くしかない。たとえ、湾岸戦争が第三次世界大戦になろうとも。

ところが、この原稿を書いている二月七日現在、行き先も、実習する分野、畜種も決まっていないのである。（言っておくが、私のせいではない。）今、私に分かっているのは、一年間アメリカに行って、農業実習をするという事だけである。この乏しい情報の中、私の頭に浮かんで来るのは、ジーパンとウェスタンブーツと軍ものとカーボーイハットを買って、帰りにカナダでスキーをして、お土産にカウチンセータを買うことくらいなのだ。オッケー！と、M田さんのように引き受けてしまったこの原稿であるが、これではどう頑張っても、「心がまえ」なんてものは書けないことがお分りいただけるだろう。そこで、せめて今の心境を。

『案ずるよりも産むがやすし』

行けばなんとかなるだろう。

青い目の金髪ボーイに思いをはせ、皆と別れを惜しみ（だれも惜しんでないって話もあるが）、M園さんと毎晩のように飲み走り（注・車なので〝歩き〟ではない）、湾岸戦争のことより、肉が安いから肥るかもしれないことを心配している、今日この頃である。

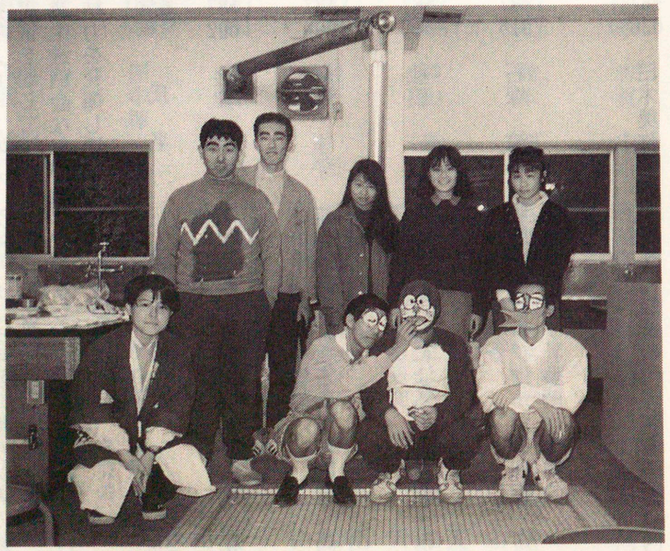
この手紙はフィクションですが、すべてが架空のものとは限りません。　筆者

一年を終えて

一年　三　沢　英　希

東京農業大学農学部畜産学科に入学してから、もう一年が経とうとしている。現在、私はとても楽しく、そして充実した日々を送っているのであるが、そんな私にしてくれた理由の一つに、八月上旬に行なわれた、夏期集中実習があると思う。この実習は、富士畜産農場において、一週間行なわれたのであるが、その実習内容は、私が実習前に想像していたこととは、くい違うことが多くあった。その中の一つに、草地実習というものがあった。どんなことをやるのかと思っていたら。行き着く所は、草地なんかではなく、草一つ生えていない荒れ地だった。その荒れ地には、大きな石がごろごろと落ちていて、私たちはその石を汗だくになりながら、せっせと拾い集めていた。その時私は、「これのどこが草地実習なんだ。これは土方じゃないか。」と思っていた。作業をしているうちに、その日の実習は、略そのことだけで終ってしまった。納得がいかなかった。その次の日も、梱包を荷台に積み上げたり。顔中真っ白になりながら石灰をまいたりと雑用ばかりで気分的に面白くなかった。その他の実習も終了し、一週間の夏期集中実習が終わると同時に、さく葉という課題を出された。家に着いた私は、実習中に採集した牧草を広げてはみたが、牧草の種類を良く知らない私には、どれも同じに見えてしまい大変困っていた。「とんでもない課題を出されてしまった。めんどうくさいなあ。」と、思っているうちに、さく葉の提出日がだんだん近づいて来てしまった。ピンチである。とにかく何かやらねばと思い、友人のMとYと三人で図書館へ行き、牧草や雑草の掲載されている図鑑を借りて来て調べて見た。まず東京近辺に生息するものを取上げて見てとりあえず家の周辺を歩いてみた。「あった！」まず一つ見つけた。普段、気にもかけなかった雑草が、なぜか美しいものに見えてきてしまった。そうこうしているうちに、どんどん草が見つかってきた。何とかさく葉は完成した。手や指を泥だらけにして雑草を探した日のことを思い出し、苦労した甲斐があった、と満足感に浸った。ふと、あの実習のことを思い出した。「あの荒れ地、きれいな牧草地になるんだ。自分達が、石ころをどかし、石灰をまいて耕したんだからな。」こんな風に思った。確かに、あの実習の時もこんな風に思った。しかし、その思い方の度合が全然違っていた。牧草地を見て何かを感じたり、学んだりするのと、牧草地を作って、その牧草地を見て何かを感じたり学んだりするとでは、その何かというものは、格別に違ってくるであろう。私は大切なことを忘れていた。牧草地を作るという大切なことを忘れていたのだ。土台づくりである。今まで、私は上の方ばかりを見ていた。下の方も見て、昔からの長い畜産の歴史をしっかりと見つめるべきである。先端技術を学ぶうえではなおさら、そのことを忘れてはならないことを私は信じている。

夏期集中実習を終え、大切なことを学び、良いことをしてきたのだ、と楽しい思い出と共に満足感に浸った。



研究室だより

平成二年度
畜産学科
卒業題目

畜産物利用学研究室

本研究室は、室長の山中良忠教授をはじめ、高橋強嘱託教授、古川徳講師、松岡昭善講師、飯山禮文副手の5名の先生方の御指導のもとに、大学院生2名、4年次生36名、3年次生21名、2年次生1名の室員がそれぞれ活発なる活動を行なっています。

研究テーマは大きく次の4つに分けられます。

◎卵の細胞活性物質に関する研究。
◎乳酸菌の培養法とバイオテクノロジーに関する研究。
◎発酵乳製品の栄養生理的な作用に関する研究。
◎各種畜肉の種属特異的タンパク質の検索および栄養成分の比較に関する研究。

また、加工利用では、消費者に対して有効でよりソフトな食品の開発に取り組み、さらに加工所における実習を通じて製造設備・製造技術への理解を深めることにも努力しています。

その他の主な活動としては、月例ゼミナール、新入室員歓迎会、乳酸飲料製造実習、収穫祭の文化学術展、模擬店（ロースハム、スモークドチキン、プリン等の製造実習を通じて）への参加、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会などがあり、こうした行事には素晴らしい団結力を発揮し活動しています。

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
f87002	会津　航	スターチゲル電気泳動法による鳥類肉の鑑別	松岡
f87008	阿部　圭子	細胞融合法による中温性乳酸球菌の育種	高橋 山中
f87012	池田　一志	免疫学的方法による肉種鑑別	松岡 天野
f87016	石塚　涼子	腹腔内マクロファージの細胞障害に及ぼす乳酸菌代謝物の影響	古川
f87026	臼木美弥子	中温性乳酸菌の代謝制御に関する研究	高橋 山中

f87028	内海　絵美	ELISA法による未加熱混合肉中の馬肉の検出	松岡
f87038	小川　瞬	高速液体クロマトグラフィーによる各種肉筋漿蛋白質の解析	松岡 山中
f87040	尾崎　弘幸	各種家畜肉筋漿タンパク質のグラジェントゲル電気泳動像の比較	松岡
f87041	小野　郁子	130kgまで肥育したイノブタの肉質に関する研究	松岡
f87051	川口　聖子	ケフィール粒構成成分の液性免疫に及ぼす影響	古川
f87056	神戸　英夫	等電点電気泳動法による各種家畜肉筋漿タンパク像の比較	松岡
f87068	小林百合子	ELISA法による未加熱混合肉中のカンガルー肉の検出	松岡
f87076	佐藤　裕二	北海道後志地区の高等学校における農業教育の現状と動向	赤木 山中
f87078	三野　穣	肺転移に及ぼす乳酸菌代謝物の影響	古川
f87081	志賀　忠市	乳酸桿菌の細胞融合に関する基礎的研究	高橋
f87087	鈴木　則幸	各種添加物がソーセージの品質の及ぼす影響	松岡 山中
f87088	関山　幸男	免疫学的方法による近縁肉種の鑑別に関する研究	松岡 天野
f87089	瀬下　徹	植物繊維の添加がソーセージの品質に及ぼす影響	松岡 山中
f87091	高野　和也	山羊乳チーズ熟成中の風味成分の変化	古川 山中
f87094	田中揮一郎	グラジェントゲル電気泳動法による鳥類筋漿タンパク像の比較	松岡
f87097	玉置　浩二	マクロファージ貪食能に及ぼすケフィール粒構成成分の影響	古川

f87106	中島　潤也	チーズの促熟に関する基礎的研究	古川　高橋
f87108	中山　浩	馬肉の肉質に関する研究	松岡　山中
f87114	蓮尾　知子	T細胞活性化に及ぼす乳酸菌代謝物の影響	古川
f87116	原　啓子	ビフィズス菌活性因子に関する研究	高橋
f87117	原田　章弘	無去勢雄及び雌山羊肉の理化学的性状	松岡
f87132	松枝　秀樹	山羊乳カゼインの理化学的性状	古川　山中
f87140	三堀　太郎	豚の成長過程における脂質組成の変化	松岡
f87142	村木　力也	紫外線による乳酸菌の変異	高橋　山中
f87144	森　英	チーズの収量に及ぼす各種添加物の影響	古川　高橋
f87154	山根　崇雄	粗飼料を多給して飼育した日本短角種去勢雄とホルス去勢雄の肉質の比較	松岡　佐藤
f87159	吉田　智之	乳酸菌代謝物の細胞増殖に及ぼす影響	古川
f87162	了戎　実	ELISA法による家兎肉の検出	山中
f87708	浅川　篤	卵黄グラニュールの細胞活性化について	古川　山中
f87069	七條　弘史	オーストラリア牛肉産業の生産構造	新井　山中

畜産経営学研究室

我が畜産経営学研究室は、新井教授、石岡講師の指導のもと、4年生30名（うち1名、海外実習のため休学中）、

3年生19名より構成されています。

当研究室では、畜産における経営、経済の面を中心にコンピュータによる統計的処理、分析を行っています。今年は牛肉の輸入自由化が始まり、それにおける経済の状況、畜産農家の経営の変化等、「経営」における問題がより一層多くなってきます。この為、当研究室では自由化に対応していくための研究や、経営をさらに発展させる研究が進んでいます。

研究室の活動内容は、家畜はいませんが、毎日当番制があり、3年生の夏季休業中には約2週間の農家実習が予定されています。又、普段の研究室の授業では、パソコン演習、経営学講義、経営分析等があり、その日の課題が終るまで、夜遅くまで先生や先輩が熱心に指導しています。

パソコンや簿記は現在の農業経営分析に欠かせないものとなっており、当研究室も台数を増やし、又、パソコンソフト、図書や統計資料も完備しています。このため後は我々のヤル気次第で研究の成果も決まり、今後の畜産経営を発展させるといっても良いでしょう。

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
f87005	芥川　英治	闘牛と農村社会 —特に新潟県古志郡山古志村の事例—	新井
f87007	芦川　誉	酪農家の生活時間及び労働時間に関する調査	新井
f87023	今井　士郎	肉牛肥育における粗飼料の調達形態について	石岡
f87024	岩島　潤一	酵素飼料を給与している養豚経営の経済性について	新井
f87027	臼田　光志	大規模酪農経営の問題点と改善方向	石岡
f87029	打越　秀一	小規模採卵養鶏の存立要件に関する研究	石岡
f87036	緒方　敦	酪農ヘルパー制度の成立条件	新井
f87039	荻原　剛	銘柄牛確立への課題 —栃木和牛を中心に—	石岡
f87049	金子　英勝	牛乳に対する消費者の購買意識調査	石岡
f87063	久保田浩規	大規模養豚における繁殖成績の統計的分析	新井

f87066	倪　清基	台湾養豚産業の生産構造	新井
f87067	郡山　守	牛乳生産の季節性とその対策 ―北海道佐呂間町の調査から―	新井
f87072	酒井　美佳	酪農経営における機械化と労働の質的変化	新井
f87077	佐藤　義明	牛肉及び子牛価格の関係に関する統計分析	新井
f87098	張　尤喜	採卵鶏の生産管理に関する研究	石岡
f87111	野村　克也	熊本県における褐毛和牛生産の現状と今後の課題	石岡
f87118	平野　倫史	繁殖牛経営の可能性を探る	石岡
f87121	藤井　茂司	鶏糞処理とその商品化に関する研究	石岡
f87128	堀尾　忠史	日本農民の価値体系の変化について	新井
f87135	三浦　幸治	牛肉価格の推移とその要因について ―流通段階の格差―	石岡
f87146	八木　秀実	牛肉消費の地域性について	石岡
f87152	山田　博文	畜産に生きる人々 ―被差別部落とその生業―	新井
f87153	山梨　暁史	牛の副産物の追跡調査	新井
f87163	渡邊　啓	皮革の流通構造について	新井
f88501	渋谷　徳雄	牛肉消費の可能性を探る ―消費者の購買行動調査から―	石岡
f86042	神高　京子	牛乳に対する消費者購買行動	石岡
f89604	高崎　一夫	消費者の牛肉購買行動について ―店舗選択の条件に関する調査―	石岡
f86012	井上　二郎	卒業後の進路選択に関する一考察 ―農家の後継者問題を考える―	新井

f86058	斎藤　茂樹	サラブレッドの血統競争の研究	石岡
f86100	豊田　誠	軽種馬生産の現状分析	石岡

家畜生理学研究室

当研究室は、渡邊誠喜教授を室長として、津田恒之教授、半澤恵助手、研究員1名、大学院生2名、4年次生15名、3年次生18名、2年次生1名より構成され、日々明るく楽しく、研究室生活を頑張っています。

主な研究内容としては、

◎家畜・家禽の内分泌生理に関する研究
◎家畜・家禽の代謝に関する生理遺伝学的研究
◎家畜・家禽の体液に関する免疫学並びに血清学的研究（含モノクローナル抗体）
◎家畜・家禽の細胞膜に関する研究
◎反芻家畜の消化生理に関する研究

などであります。そしてこのような研究を支えてくれる実験動物には、消化生理担当のマリリン（♀羊）をはじめとして、泌乳のとまらないめぐのママ（♀山羊）、繁殖力旺盛なばかやぎ（♂山羊）、採血担当のエヌビー（♀羊）、烏骨鶏を中心とした鶏たち、おからの好きなうさぎたち、収拾がつかないうずらたちなど、様々な動物が室員として活躍しています。このような動物たちの世話は大変ですが、みんな動物好きで、大変かわいがっています。

年間の行事としては、新入室員歓迎会、富士畜産農場実験実習、収穫祭への参加、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会、定期総会、ゼミナール、談話会、ボーリング大会などがあります。

我々研究室員一同、みんなで力を合わせて、何事にも頑張っております。

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
f86133	堀田亜里子	運動負荷における馬血中のミネラル組成変化	渡邊
f87013	池田　秀人	ミクロ2次元電気泳動法による母、子緬羊血漿蛋白質並びに母緬羊乳清蛋白質の経時的変化に関する研究	渡邊
f87033	及川　一也		
f87018	石橋　貴徳	モノクローナル抗体によるウズラリンパ球の分類	渡邊
f89605	山岸　未夏		

87035	大町　孝浩	サラブレッド種馬の運動負荷による血液中遊離アミノ酸濃度の変化	渡邊
87074	佐々木晃一	比重分離法による馬赤血球集団間の生理化学的性状の差	渡邊
87079	椎名　隆	ウズラ真核細胞のDNAの多型に関する研究	渡邊
87083	下山　智紀		
87086	鈴木　和明	ウズラの免疫臓器におけるT細胞とB細胞の推移に関する光学的並びに電子顕微鏡的比較	渡邊
87102	内藤　隆則	馬赤血球のアミノ酸の取り込みに及ぼすThiol基反応試薬の影響	渡邊
87129	前迫　明子	咀嚼行動の第一胃内消化率に及ぼす影響に関する研究	渡邊 津田
87157	吉兼　由美	低温保存が対外受精由来牛胚盤胞の内細胞塊の形態並びに細胞数に及ぼす影響	渡邊 岩崎
			院生
	山内　徹也	メン羊の血清鉄、鉄輸送蛋白質濃度の変動並びに腸管からの鉄吸収に関する研究	渡邊
	折原健太郎	運動負荷がサラブレッド種馬の血液性状に及ぼす影響	渡邊

家畜飼養学研究室

現在の畜産物の消費者ニーズは高度化、多様化し、高品質低コスト需要が高まってきている。

この中で飼養学の位置は極めて重要な分野である。

生産物コストの80％以上を占める飼料、又、生産高の管理は、成否を決定する要因である。

このため我が研究室では、家畜飼養学の主な柱である家畜栄養学、飼料学、家畜管理学を基礎にふまえ、杉村敬一郎教授、亀岡暄一教授、伊藤澄麿助教授、栗原良雄助教授を中心とした指導のもとに、アミノ酸、エネルギー代謝、サイレージ、牧草、飼養試験、飼育管理等について種々の研究活動を行なっている。

研究室行事としては、富士農場における畜産実習、浅間育成牧場、神津牧場における家畜管理実習ならびに一般飼料成分分析演習等を行なっている。

また、室員相互の親睦を計るために、収穫祭の文展・模擬店への参加、研修旅行、餅つき大会等を行なっている。

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
87046	加藤　博之	暖地型牧草の生育時期による成分の変化とリグニン含量の相関に関する研究	亀岡 栗原
87052	河崎　生充	ラット腸管部位におけるアミノ酸吸収の差	杉村
87073	佐々木　淳	サイレージ調製時の水分含量の相違が栄養価におよぼす影響	亀岡 栗原
87075	佐々木　保	『NRC Nutrient Requirements of Horse』1989年版の翻訳および1978年版との比較検討	伊藤
87093	高橋　徹	サイレージ調製時の水分含量の相違が品質におよぼす影響 一般成分およびVBNについて	亀岡 栗原
87120	福田　雄一	中雛の高温環境における給与飼料中のタンパク質およびエネルギー水準の検討 成長、タンパク質およびエネルギーの消化率について	伊藤 栗原
87123	藤田　良朗	家兎のエネルギー代謝における耳の役割について	伊藤 栗原
87124	舟戸　保典	サイレージ調製時の水分含量の相違が品質におよぼす影響 pH、VFAおよび乳酸について	亀岡 栗原
87133	松坂　道昭	寒地型牧草の生育時期による成分の変化とリグニン含量の相関に関する研究	亀岡 栗原
87137	水野　幸治	中雛の高温環境における給与飼料中のタンパク質およびエネルギー水準の検討 エネルギー代謝について	伊藤 栗原
87147	安野　和幸	幼兎における食糞阻止が成長におよぼす影響	伊藤 栗原

f87158	吉田　勝栄	高周波乾燥におけるＡＤＦ低下の原因究明
	亀岡　栗原	
f89602	伊藤　兼政	飼料タンパク質のルーメン内分解率の測定とアミノ酸組成の変化について
	亀岡　杉村	

家畜育種学研究室

家畜育種学というのは、動物の進化の方向を、人間の必要とする方向に変更し、促進するための学問体系である。家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝学、育種学、特に血清学、分子生物学的見地から広範囲にわたり研究活動が実施されています。

当研究室では、柴田寛三教授をはじめ、田中一栄教授、天野卓助教授の指導の下に古郡実験助手、大学院生3名、4年生17名、3年生11名で構成され、室員各自の自覚と互いの協力により、それぞれの目標に向って頑張っています。電気泳動や、モノクローナル抗体を用いた血液型の研究をはじめ、各種の研究が行なわれています。

研究室における日常の活動は、実験動物の飼養管理による家畜との接触や、毎週行なわれているゼミ、定例室員会、他に、卒論等の研究、実験における問題点を解決する為に、昼夜を問わず、熱心に討論されています。更に、研究活動は学内だけに止まらず、先生方は、学会や研究の為、海外に出張されたり、また、学生も他大学および他研究機関に出向いて研究を行なっています。

研究室における年間の主な行事としては、新入生歓迎会、定期総会、収穫祭への参加、研修旅行、卒業論文発表会などがあります。

なお、平成2年度の卒業論文の題目は次の通りです。

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
f87044	粕谷恵一郎	牛集団の類縁関係に関する統計遺伝学的研究	天野
f87047	加藤　雅昭	ポリアクリルアミドゲル電気泳動法による豚血液蛋白型の検討	田中
f87050	上村　成樹	トランスジェニックマウス作製に関する基礎的研究	天野
f87053	川崎隆太郎	水牛の血液蛋白質に関する研究明	天野

f87054	上林　尚生	キャッサバ澱粉による電気泳動法の検討 ―特に韓牛およびインドネシア牛を用いて―
	天野	
f87057	吉川　幸夫	マウスにおける受精卵着床のメカニズムに関する基礎的研究 ―胎盤形成における諸種のサイトカインの影響―
	天野	
f87058	吉川　欣亮	ウシにおけるヘモグロビンおよびカーボニックアンヒドラーゼ型の遺伝的変異に関する研究
	天野	
f87059	木村　毅	モノクロナール抗体によるウシの血液型に関する研究
	天野　吉田	
f87060	日下　博詞	等電点電気泳動法による豚血液型の分析
	田中	
f87069	小山　克	丹沢山系におけるツキノワグマ (Ursus thibetanus japonicus) の行動圏
	平井　田中	
f87095	田中　晃	ヤギにおけるミトコンドリアＤＮＡの制限酵素切断型について
	田中	
f87101	富田　宏	ウシの血液蛋白質に関する研究
	天野	
f87110	生和　伸一	豚血球酵素の多型に関する研究
	田中	
f87115	早川　寛二	ウシの血清蛋白型の遺伝的変異に関する研究
	天野	
f87119	福田　孝彦	モノクロナール抗体による水牛の血液型に関する研究
	天野	
f87151	山田　一富	モノクロナール抗体による馬の血液型に関する研究
	天野	
f89603	鈴木　明美	高精度分染法によるウサギの染色体分析
	田中　柴田	
f86116	野口　正樹	豚およびイノシシの形態的変異に関する統計学的解析
	田中	

86136	松島　和宏	豚集団における血液蛋白多型の統計遺伝学的解析　田中
85125	浜田　直樹	韓国在来山羊の実験動物化に関する基礎的研究　天野　柴田

家畜衛生学研究室

本研究室は、東量三教授、近江弘明助教授、渡邊忠男講師、各先生の御指導のもと、4年生24名、3年生19名、2年生1名によりなりたち、研究室活動を行っています。

研究室活動としては、室員各自希望する家畜、家禽別に、牛班、豚班、鶏班、実験動物班の4班に分かれ、各家畜、家禽に対し、主に次のような研究が行なわれています。

◎家畜、家禽の各種疾病に対する予防並びに診断に関する研究

◎動物由来微生物の生理、生体に関する研究

◎内部、外部寄生虫の生態並びに駆除に関する研究

◎家畜、家禽の環境衛生に関する研究

また、本学家畜診療所においても、一般外来動物の診療を中心に、各種の研究活動が行なわれています。

その他研究室の活動内容は、年間行事を通して新入室員歓迎会、ソフトボール大会、収穫祭参加（文化学術展、模擬店）、研修旅行、送別会、ゼミナール等があります。このような、多面にわたる活動により、学生生活の充実と、室員が一体となった活発な研究室活動を目指し、研究室在室中に一つでも多くの事を学びとることに、我々は日々努力しています。

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
87003	相原　武	運動量の相違が馬の血液並びに尿性状に及ぼす影響	近江
87019	石渡　寛之	豚の扁桃病巣から見出される細菌・特にグラム陽性桿菌について	東　渡邊
87022	伊藤　仁之	動物舎内の悪臭に対する検討	近江
87025	印南　裕之	新設平飼鶏舎内におけるホロホロ鳥の行動と内部寄生虫の消長について	渡邊　西脇
87032	梅澤　淳一	犬鉤虫卵保有犬に対する駆除法の検討	近江

87034	大橋　育雄	飛来衛生害虫に対する駆除法について	近江
87043	笠井　良彦	低毒素有機燐剤投与が犬の血液性状におよぼす影響	近江
87048	金井　勉	豚の生育に伴う歯牙の組織学的観察	近江　鈴木
87061	久野　慎二	動物由来培養細胞における鶏病病原ウイルスの増殖性の検討	渡邊
87062	久保　幹夫	嫌気性グラム陽性桿菌のDNAについて	東　渡邊
87064	倉形　方子	E. tenella 野外分離株の薬剤感受性について	渡邊
87092	高野　慎哉	犬の歯牙並びに歯周病変に由来する細菌・特にグラム陽性桿菌について	東　近江
87096	田中　則子	多症候発現猫の臨床的観察	近江　東
87099	土屋千亜紀	化粧品類塗布家兎における皮膚の病理組織学的観察	近江
87100	鶴田　豊	鶏マイコプラズマの野外分離とその薬剤感受性について	渡邊　東
87105	中里　みき	精管結紮法による実験動物の去勢について	近江
87109	鳴嶋　秀男	富士畜産農場飼養愛玩鶏の内部寄生虫寄生状況	渡邊　西脇
87125	細川　勝	マイコプラズマ人工感染鶏に対するマクロライド系抗生物質の感染防御効果の検討	渡邊　東
87130	前田　利光	各種消毒剤の試験管内殺菌性とその野外有効性との関連について	東　渡邊
87131	松井　真一	卵巣、子宮摘出犬の臨床的変化について	近江
87139	道見　健男	ホロホロ鳥胚を用いたE. tenella培養法の検討	渡邊

f87143	村松　孝一	マイコプラズマ人工感染鶏に対するマクロライド系抗生物質の投与法の検討	渡邊　東
f87148	安原美津江	豚の発育に伴う歯牙の形態的観察	近江　鈴木
f86002	浅田　直毅	都市近郊の動物公園における衛生害虫の実状と防除について	近江

家畜繁殖学研究室

わが家畜繁殖学研究室は、主任教授の一戸教授をはじめ、門司助教授・桑山助手の指導の下、大学院生4名、研究生1名、四年生24名、三年生20名から構成されています。

家畜・家禽の効率的な繁殖方法を追求している当研究室では、繁殖生理に関する基礎的なものから、人工受精並びに受精卵移植に至る実用面まで広範囲の分野にわたる研究を実施しています。具体的内容として①生殖リズムとこれに対するホルモン関与　②繁殖行動に対する内分泌的要因　③精子並びに卵子の凍結保存　④体外受精・核移植・受精卵移植の研究などがあげられ、高度の学理のみならず応用面についても追求を行なっています。お互いの知識を交換することにより、各自の研究をより充実したものにするため、週一回のゼミナールを開いています。

また、わが研究室では、新入室員歓迎会・年2回のボーリング大会・卒業生送別会などにより、学生と教員の親睦を深め固い団結力で日夜頑張っています。

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
f87004	秋葉　夕夏	Percoll密度勾配遠心法によるウサギ精子の性状と分離	門司　一戸
f87006	浅井さつき	希釈および凍結方法の違いによるウサギ精子の生存性と頭帽の形態観察	門司　一戸
f87009	阿部　忠宏	ゲッチンゲン系ミニチュア豚精液の一般性状と凍結保存	門司　一戸
f87011	飯野　利正	外因性メラトニンが日本ウズラの性腺機能に及ぼす影響	一戸

f87021	伊藤　透	セイロン野鶏（♂）と岐阜地鶏（♀）の交雑鶏に見られる形態的特徴について	一戸
f87030	内田　景子	鶏精子の凍結保存に関する研究―耐凍剤としてのグリセリン濃度について―	一戸
f87031	生方　弘子	牛体外受精―精子処理方法および精子生存性が受精率に及ぼす影響―	門司　一戸
f87037	小川　久美	岐阜地鶏の母性行動に及ぼす卵または雛の存在について	一戸
f87045	加藤　奈々	ストレスの負荷が雌マウスの着床・妊娠・分娩に及ぼす影響	一戸
f87065	栞原　一豪	ミニチュア豚精液の凍結速度の違いによる精子生存性および頭帽形態に及ぼす影響	門司　一戸
f87070	合原　博俊	豚体外受精胚の凍結保存に関する研究	門司　一戸
f87084	荘司　健一	スナネズミの哺育各期における血中コルチコステロン濃度について	一戸
f87085	杉沢　潤	ウサギ胚およびブタ胚のガラス化保存における保存液の検討	門司　一戸
f87090	外丸　祐介	マウス胚の初期発生段階における蛋白合成パターンの解析	一戸　河野
f87103	中井　一徳	牛体外受精―卵丘細胞の付着状況が卵子の成熟および受精率に及ぼす影響―	門司　一戸
f87104	中井　義成	豚体外成熟卵子の体外受精とその後の発生状況について	門司　一戸
f87113	橋本　香奈	牛体外受精―発生培地へのホルモン添加が胚盤胞期胚への発育に及ぼす影響―	門司　一戸
f87122	藤田　晴生	牛体外受精―完全体外培養系による胚盤胞期胚への発育について―	門司　一戸

f87127	細野　淳	牛体外受精―同一処理した凍結精子の受精の受精および発生率の種雄牛間比較―	門司一戸
f87155	横川麻紀子	豚体外受精―成熟培地でのホルモン添加が受精率およびその後の発生に及ぼす影響	門司一戸
f87156	吉池　一広	Percoll 密度勾配遠心法によるミニチュア豚精子の性状と分離	門司一戸
f87164	渡邉　進	同居条件の差異がラットの母性行動に及ぼす影響	一戸
f86020	大石　周代	貯卵時における温度操作が日本ウズラの孵化率に及ぼす影響	一戸
f86082	高野　恵	カナダ（ブリティッシュ・コロンビア州）における乳用山羊飼育とその利用について	門司一戸

収穫祭だより

収穫祭を終えて

三年　廣田武司

平成三年十月八日、第九十八回収穫祭畜産学科統一本部本部開きは、雨であった。この日、自分は統一委員長として挨拶をした。挨拶の言葉は、よく覚えていないがとにかく緊張してひざはガクガク、口は回らないという状態だったことだけは、はっきりと覚えている。そしてその挨拶が終わった時に、初めて自分は統一委員長というとんでもない役を引き受けてしまったことがわかった。

本部開きが終わり、いよいよ本格的な作業開始である。作業はいろいろとやることが多く、みんな一生懸命作業をしているのにも係わらず、なかなか準備の方はうまく進まない。収穫祭の日はどんどん近づいてくる。みんながあせってくる。しかし、皮肉な事に人間焦れば焦るほどイライラしてきて作業の能率は上がってこないのである。準備はうまく進まなくても、時間は容赦なく過ぎて行き収穫祭当日が刻一刻と迫ってくる。残り少ない時間で、やるしかないのである。この時間はもう、本当に死にものぐるいでがんばった。会話はなかったが、本当に一致団結していた。会話がなくても、相手の気持を分かり合い、収穫祭を成功させようと一つになっていたのである。この一致団結した死にものぐるいの力でなんとか準備は終わった。たぶん最後のパワーは他学科にはない、いや絶体に他学科にはない、決して真似の出来ないすばらしい畜産学科のパワーであった。そして収穫祭、一日目・二日目・三日目・一日おいて体育祭と準備の段階での、あのいそがしさが嘘のように時間はゆっくりと静かに過ぎ去って行った。

とんでもない役を引き受けてしまったと思った十月八日と本当にやって良かったと思った十一月五日。このいろいろとあった約一ヶ月、自分にとっては、本当に充実感と満足感でいっぱいです。そして、心に何か大きな勲章を得た様な気がします。この収穫祭のことは、一生忘れないでしょう。

東京農業大学農友会
第九十八回収穫祭
畜産学科統一本部

バンザイ

最後に、私に陰ながら手助けして下さった先生方、そして、手助けしてくれると共にわがままを聞いてくれた先輩の方々、並びに同輩達、後輩達、本当にありがとうございました。

始めの一歩

三年　横井　厳

第九十八回収穫祭畜産学科宣伝隊隊長に命じられ、九月後半から十一月五日まで、色々な思い出ができた。失敗談を書けば、本一冊できるだろう。嫌気がさした思いを書けば、これもきりがないだろう。結局の所やるきがない気持で、収穫祭が過ぎてしまったと言えばそうかもしれない。

「何で俺が駆けずり回って頭を下げなければならないのか、何で、町の真ん中で大声を張り上げなければならないのか、何で、みんなが眠っている真夜中までカナズチを握っていなければならないのか。」

収穫祭中はこんなことを考え、時には物に当たったことまであった。でも俺のこんな気持と裏腹にたくさんの人が集まってくれ、俺のやるきのなさを圧倒するかのような誠意をみせてくれた。

畜産のトレード・マークのツナギに白長で、町を歩くなんて誰だっていやがることをみんな、嫌な顔一つせず、歩き回り、盛り上げ俺の作った学科のみこしを農大通りでは三位に盛り上げてくれた。

収穫祭の最終日、ファイヤーストームの中での表彰。拍手の中、俺は表彰台にたち、拍手の中からみんなの喜び、祝福してくれる声を聞いていた。ファイヤーストームの火が弱まり、ファイヤーストームを消すために人が、俺と各学科の宣伝隊長を残すのみとなった時、俺はやっと終わったとおもう気持ちの中で淋しさも感じていた。俺のやるきのなさから始まった収穫祭を失敗の連続の中に光を射してくれたのは自分の力でなく、みんながいなければと、他にもやらなければならない事を俺の代りにやってくれた人たちを思うとなんともなくいえない気持ちになった。

祝も言わずそのままになってしまったが、この場を借りてお祝いが言いたい。俺の無理な願いをきいて、いっしょうけんめい働いてくれた一年生と、みこしを最高のものにしてくれた人たちと、俺のかってで、迷惑をかけた研究室のひとたちに、

「本当にありがとうございました。」と……

一枚のコイン

三年　保科　幸広

表彰者は、

「三日間、本当に良くやりましたね。」

と、言いながら賞状を手渡してくれた。

そのとき、じぶんは震えがとまらなかった。沸き上がる歓声と拍手の中で、目もくらむほどのライトを浴びながら自分は充実感で真っ白な灰になっていた。今までしてきた、辛かったこと、苦しかったこと、悲しいこと、楽しかったすべてが脳裏に一瞬にして蘇る……。その歓喜の中では言葉は要らなかった……。

10月に入る前から自分は、収穫祭に備えて泊まり込みの体制に入った。一昨年、昨年同様、自分が担当するのは、前夜祭・特別企画部門であった。何の因果か知らないが一年生の頃からこの部門に携わり、去年は副委員長を務めさせて頂いた。もっとも去年は十月の終わりに父が急病で倒れたため、収穫祭そのものには参加できなかったので、また今年で三年目ということもあり、第九十八回収穫祭には「今度こそは！」という気迫で満ちていた。例年に加え、今年はサークル（第三文明研究会）、研究室（家畜衛生学研究室）の文化学術展の出展準備もあるため、その繁雑さは究極であると推測された。

10月に入ると役員の割り当てがなされた。思った通り、前夜祭・特別企画の委員長には自分がなった。が、今年は副委員長並びに会計以下、参与の学生が一人も出ないという決定を見た。先立って行われた懇談会で伊藤先生は、「前夜祭・特別企画七部門に各々責任者を設けたらどうか？」との提案を頂いたが、事実、現二年生には畜友会役員はおらず、一年生もごく少数であり、また畜産学科統一本部全体七部門の大所帯を考慮すると、前夜祭特別企画部門には多くても二人が限度であると言われ、その二人すら他の部門との兼任を余儀なくされる、といった現状であった。去年を振り返ると、前夜祭・特別企画を手伝ってくれた同輩達はみな他の部門の長となって動くことになったので、今年はその応援も期待できなくなった。これはかねてから想像していた事態ではあったが、いざ現実となってみるとあまりの仕事の大きさに気が遠くなりそうであった。が、前進あるのみ。二人の一年生のうち片出君を副委員長に、三沢君を会計において本部開きに望んだ。

収穫祭準備も本番になる10月中旬。前夜祭・特別企画としては野外劇、前夜祭劇、ミスター農大、ミス農大、美人コンテスト、先生のど自慢、学生のど自慢各部門のシナリオ、BGMテープの作成、バックボード作成、演出、出演等々、一年生が副委員長のため、それらの作業はすべて一人で企画・進行させねばならず、加えて研究室の文化学術展冊子作成、サークルではスライド上映のため

のシナリオ作成などのお仕事が、自分に24時間体制で重く、競いあうようにのしかかってきた。

学科、研究室、サークルというトライアングルは自分を必要以上に苦しめた。睡眠時間週10時間（講義中の睡眠は含んでおりません）、体重10kgの減少、血尿の検出、10万円の小遣い前借り、スピード違反（関係ない？）等々、挙げればきりがない。

そんな自分におかまいなしに時間は過ぎ、シナリオの締め切りが迫っているにもかかわらず、その完成は遠かった。同輩達の夜を徹する協力によって、野外劇のシナリオはどうにか間に合ったが、こと前夜祭劇に関しては書き上げる原稿が、統一委員長・廣田武司のありがたい御指示によって二度もボツをくらい、OKの三本目を書き上げたのは何と、前々日の、すなわち10月29日の午前5時であった。

10月31日、前夜祭当日。寝不足、栄養不足、練習不足のやぶれかぶれの前夜祭劇は「ドラえもん」。ひっかき集めた一年生と自分でキャストはたったの五人。全員フルチューンの化粧を施し、副委員長に至っては実体も分からぬほどに変身を遂げた。雨のために体育館での開催となったのは自分達にとっては幸いであった。初めての舞台である一年生にとっては、観客が舞台上からは良く見えないので、プレッシャーが少なく、また声の通りも良いからである。……順番が迫る。直前までシナリオとにらめっこをする（まだ全て覚えていない）。そして

「12番。畜産学科統一本部」

アナウンスが流れる。BGMのテープが高らかに？。2日前にできあがった劇にそんなものはなかった。当然アカペラである。

「パッパラパッパ・パッパラパッパ……」

気も遠くなる程の恥ずかしさに我を忘れ、気がついてみれば舞台を降りていた。みっともないが、それほどに自分がアガっていた証拠である。劇の出来はまあまあであったが、なにしろシナリオがシナリオだけに結果は期待できなかった。一応はメイクを落として結果発表を待った。一年生や他の三年生は、多忙か疲労か、または「どうせ賞なんて取れはしないだろう」との思惑からか、閉会式には自分と統一委員長、副委員長の三人しか出席していなかった。自分も去年の結果が「失格」であったが故、今年こそは……、との想いとやはりダメかもしれないという気持ちが半々であった。

会場が暗くなり、司会者にスポットが当てられ、しんと静まりかえる。

「ユーモア賞。畜産学科統一本部殿」

他人事みたいな感じで聞いていた。五、六秒してから、「おまえらじゃないのか？」と他学科が教えてくれた。まるで夢遊病者のように表彰台の前に立つ。

「あと三人、出て来て下さい。」

司会者の要求は満たされなかった。

三人しかそろわないままゆっくりと授与が始まった。

賞状をて渡された時、

「これから三日間、精一杯がんばりなさいよ。」

と、ささやくように言ってくれた。トロフィーと沢山の賞品を不格好に持ちながら、初めて感じる充実感をかみしめながら、前夜祭は終わった。

そんなふうにして三日間が過ぎた。結果は六部門において五つの賞を得た。

これらの結果は、自分一人で成し遂げられたわけでわなく、諸先生、先輩方、同・後輩のみなの協力があったからこそ獲得したものである。

この場を借りて、様々なかたちで御協力して頂いた方々、特に顧問を務めて下さった渡辺忠男先生、先生のど自慢に出て下さった半澤先生、飯山先生、応援の方々、そして陰ながら自分を支えてくれた人々全員に、心からの感謝の辞を申し上げます。ありがとうございました。

収穫祭準備期間約一ケ月。学んだものは実に多い。

「あしたのジョー」という劇画がある。自分はもとより漫画は読まない質であったが、なぜかその作品の最終章だけは明確に覚えている。そこにこんな一コマがある。

「俺はね、義理や人情で拳闘をやっているんじゃないんだ。命を削るような試合をやっているとき、ほんの一瞬だけど、眩しい程燃え上がるんだ。くすぶっているんじゃない。あとには何も残らない、真っ白な灰になるんだ。こんな充実感は拳闘をする前はなかったよ。」

このセリフの後、チャンピオン、ホセ・メンドーサと最終ラウンドに望む。結果としては御承知の通り、勝敗の結果を聞かないまま、ジョーは長い眠りにつく。

大きな仕事に対して未練も残らぬせいいっぱいの努力をして得られる結果は何であろう。結果は過程の中に存在し、過程こそ結果となる。結果とは後からついてくるものなのだ。たとえ、その結果が不本意なものに終わっても、それを受け入れ次なる挑戦の糧とすることができる。事実、結果は悲しいかな、勝ち、負けの二種類しかない。まるで一枚のコインのように。放たれたコインが転がって停まった姿は、表か裏かのどちらかでしかないように。今まで自分はそのコインを必死になって垂直に立てようとしていた気がしてならない。しかし、そんな充実感の中では、その作業はまったく無意味であると言えよう……。

11月3日。閉会式。体育祭を除くすべての部門が終了し、みんな出席してくれた。まず野外劇の結果が発表される。結果は12学科中10位であった。シナリオ的にはまずまずであったが、バックボードの制作ミスからのタイムロスが主な理由である、と思われる。

各賞が発表されるにつれ、次第に不安になってきた。

「今年もだめだったかな？」

去年の屈辱は絶対に晴らしたい。この一ケ月の激闘を、みなの努力を無駄にしたくない……。

祈るような気持であった。そして……

「総合第三位。畜産学科統一本部殿。」

我が大学生活の大切な1コマ……体育祭

畜産学科　橋本裕樹

あれは収穫祭の二ケ月ぐらい前、そう、九月だったと思う。我ら畜産学科の統一委員長から体育祭の委員長を任された。自分にそんな大仕事ができるか不安であったがやるしかない。体育祭の委員長をできるのは、自分しかいない。と思い込んだ。そして体育祭への道のりがスタートした。我ら畜産学科の去年の成績はというと三位、これは重圧である。自分達に三位以下はない。と思った。がけっぷちだ。それもつま先で立っている。大げさだと言われるかもしれないが、まじめにそんな気持ちだった。そして約一ヶ月前より準備開始、とりあえずバックボードを作る時のベニヤ類の買い込みからはじまり、次に種目別の出場選手、応援合戦の構成と人集め。応援でどんな事を行うかなどは、時間をかければ決まる事である。だが、問題なのは応援合戦に出てくれる人が自分の思い通りの人数が集まるかである。ここでどれだけの人数が集まるかが委員長の力の見せどころだ。しかし私はここで甘くみすぎた。案の定、思っていたより人が集まらない。カベに当たってしまった。自分はただの力の無い委員長だったのかもしれない。そう思った。ここで各研究室を何回も通うことで解決した。大事なのは、「他人をどれだけ分からせることが出来るか」であると思う。この事を常に想いながら人と接し、後輩にも手つだってもらいながら、勝利にむけて進んでいた。

いよいよ体育祭当日、本当は前日予定であったが、雨天の為一日ずれた。昨日は緊張のせいか、あまり寝ていない。自分の気持ちは最初の入場行進から、アッと言わせてやるつもりでいた。人数はもちろん多く、しかもしんがりには雄ヤギを歩かせるという、畜産学科らしい策をとった。止し、スタートは良好である。メインイベントである学科対抗リレーの予選も、男女とも一位であった。しかし今年の畜産学科にはつきがなかったのである。勝てると思っていた応援合戦も四位、綱引きも場所が悪く三位。最後の対抗リレーの男子は一位で終ったが、なんと三位と四点差、四位と一点差の五位。くやしすぎる負け方である。でも、大変盛り上がった体育祭だったと思う。ここまで来るには、先輩方の大いなる手だすけのおかげであり、自分の右腕になってくれた一年生のおかげでもあり、同学年の友たちであった。今想い出すと、一人一人の顔がしっかりとうかんで来ます。やるだけやった。今はそういう気持 です。

そして今年、去年のこのくやし涙を、うれし涙に変えるのは、君たち後輩の団結力です。

「―畜産魂―家畜苑」

三年　原川竜也

『畜産学科のおまけとして家畜苑をやるのではなく、畜産学科代表として、学科の顔として精一杯頑張ろう、そして、もっと畜産をアピールしようぜ！』

と思い我ら畜産学科を代表する数名の学生が集まり、畜産魂の旗揚げをしたのが、収穫祭を1ヶ月後にひかえた10月始めでした。

その日から授業は身に入らず、授業が終るとすぐに3年生を集めて、今後の計画、方針、設計などを話し合いました。そこで一番初めに決めなければならないことは、家畜苑を進行するにあたって何かテーマを決めていこうということでした。ただ単につくるのではなく、この部分を見せたいんだ。アピールしたいんだという課題をつくれば、知らないうちにいろんな意見がでて、仕事が身に入るのではと思ったからです。

そしてテーマは、「外装はあまり気にせず、内容重視にし、子供が動物と接することができるよう設計しよう。」でした。

何故、子供にテーマを置いたかというと、ある日テレビで小学生が鶏の足を4本書いているのを見たからです。

「まさか。」

と思いましたが、東京の子供達は、いや大都会東京では犬、猫が身近な動物であって、牛・豚などはスーパーで食肉として見ることしかできないのです。

「それではいけないのではないか？」

と思いこのテーマにしました。

また、家畜も仔供をそろえることにしました。

それから、このテーマにあった設計をし、収穫祭を10日後に控えた日から、パイプの組み立てに入りました。

毎年、人材不足で困るのが現実である。だが今年は違い優秀な後輩達が「原川さん頑張りますよ！」といって集まってきてくれた。この大勢の力を借りて、今年の家畜苑が動きだした。

家畜苑の作業は収穫祭の一週間前からが勝負で、毎日夜中、又は夜明けまで外での作業は続けられた。またこの頃は季節がら、日に日に寒さが増し、体の芯まで冷えます。みんなで声をかけながら、暖かい飲み物でも飲みながら、途中でストーブにあたりながらやっていかないととても辛いものがあります。

また疲労と睡魔との闘いでもあった。家畜苑の作業は、すべて外なので星空を眺めながらの仕事である。雨が降って、1日でも仕事ができない日があると後々苦しくなってしまいます。また仕事が進んでいても、雨が続いた

らどうなるかな。本当に当日までに出来るのかとても不安でしたが、有志達のパワーはたのもしい限りであり、自分も頑張らなくてはと元気づけられました。

パイプ組みでもテーマを頭に入れながら、いろいろな工夫をしました。子供の目の高さにあわせパイプを組んでみたり、子供が気軽に家畜動物を触ることができるように、など、また逆に危険がないようにといろいろ考えながら仕事を行ないました。でも第一に家畜の健康を考えなければなりません。いくら外装に力を入れないといっても粗末なものをつくり家畜になにかあってはこまりまっす。ましてや病気などにかかってしまったら……そのために予算とにらめっこしながら設備に力を入れました。いくら強い風が吹こうが、大粒の雨が降ろうが動物を守ることができる立派な屋根を作ろうと計画しました。

パイプの組み立てを終了したのが収穫祭を2日後に控えた時であった。後はプラスチック製の屋根を張り風よけとなるシートを垂らせばひと段落である。仲間の顔を見ると、どの顔も真剣であったが、さすがに疲労は隠しきれず、精神力で動いているといった感じだった。すこしでも、みんなを休ませてあげたかったが、日が迫っていたので仕事を続けた。自分も正直言って体が素直に動かなくなっていた。もう限界だった。「でも委員長である俺がしっかりしなくては」と自分自身にハッパをかけ、仲間や後輩に「もうすこし頑張ろうぜ。」と声をかけながら一つ一つ仕事を終らせていった。

すべてに屋根を張りやっと完成したのが、家畜を富士農場からつれてくる日、午前2時30分であった。やっとできた。誰もがホッとした瞬間だった。でも夜が明けてくると同時に雨が降りだし、時間がたつにつれて雨脚はきつくなり、しだいに大雨となってしまいました。

しかし我々が苦労して作った牛舎は、立派な屋根のおかげで床をぬらすことなく雨を防いでくれました。「作ってよかったな、あんなに苦労したんだもんな！」と誰かがポツリといったひと言が今でもはっきりと覚えています。

十一月一日からの収穫祭当日から3日間は、我々の予想をはるかに上回り、仔豚、仔山羊を見る人達、ヒヨコや仔兎を抱く子供達で大盛況でした。収穫祭中もまめに除糞をして床を常に清潔に保ったためか、家畜を汚すことなく奇麗な状態でお客さんに見せることができ自分でも満足しています。

十一月四日、五日と動物達を無事帰し、片付けをしてすっかり奇麗になった4号館前を見て、やっと終ったという安心感と、家畜苑をやりとげたという充実感で、胸がいっぱいでした。本当に苦しかったけど、家畜苑をやって後悔はしていません。最後に得た充実感は、やったものでしか味わえないものだと思います。

最後まで、自分についてきてくれた仲間、後輩の方々又「頑張れよ！」と声をかけて下さった先輩の方々、そして

毎晩、食事を作ってくれた木村さん、本当にありがとうございました。

最後になりましたが、顧問を引き受けて下さった近江弘明先生、山中良忠農場長をはじめ富士畜産農場の方々、そして渡邊誠喜先生をはじめ各研究室の方々、先輩方、本当に有難うございました。来年も御迷惑をおかけすると思いますが、その時はどうぞよろしくお願い致します。

後輩のみなさん、来年も畜産魂を忘れることなく家畜苑を盛り上げて下さい。

昨年の家畜苑委員長、細野先輩と同様、私も今回委員長を務めることができ誇りに思います。

北門装飾を終えて

三年　水島正人

「水島！　北門装飾頼むぞ。え、なんで俺がやるんだよ。大丈夫、大丈夫。楽だよ。」という軽い言葉に乗せられ北門装飾委員長を引き受けることになった。

実際、作業が始まってみると決して楽なものではなく、開始してから完成するまでの期間というものは、かなりハードで長いものであった。特に私にとってこのような経験が初めてだったため、不安などたくさんあったが、すべてを終えてみて、この経験が単に大変だった、で終わってしまったものではなかった。そのハードで長いものの中から、やってよかった、という気持ちにさえなったのだ。

北門装飾の始まりというのは、とても慌ただしいものであった。夏休みも、もう終わろうとしている時のことである。私は役員を引き受けたことなど忘れて、残り少ない夏休みをどう過ごすか考えていた矢先、もう収穫祭の準備が着々と進められているということを知ったのだった。慌てて畜友会室へ行くなり、「早く見積書と下絵設計図を出せ。収穫祭実行委員長のところへ挨拶に行くぞ。」などと、あれやこれや言い付けられ、もう頭の中は大パニック。こうして改めて事の重大さに気づいたのであった。こうして準備は次の段階へと進められていった。

作業の方は、主に自分を含め、副委員長の松井君、会計で一年生の原野さん、三人で進められていった。初めはこの人数でどうやって終わらすのか心配だったが、途中助人として、渡辺君、西尾君を初めたくさんの人が手伝ってくれたおかげで、どうにか、ぎりぎりまでかけて完成することができた。この期間、いろいろなことがあった。意見がなかなかまとまらず悩んだり、長期に渡る作業のため疲れが出て体調をくずす者、また作業に集中し過ぎ、余分に塗り過ぎたり、テーブルの上からおっこちて、作品を壊してしまう者、あげればきりがないが、とにかくいろいろなことがあった。こうしたみんなの努力、助け合いにより、北門装飾は完成までたどりついたのである。睡眠時間を減らし、自由な時間を減らし、時には授業もさぼり？みんな頑張ってくれた。

最初は、なんでこんなことしなければならないんだ。などと思っていたが、完成した時の喜びこれは参加して頑張った者にしかわからない喜びがある。北門を通る時歓声を上げる人、立ちどまり写真を撮る人。などを見かけた時ほどうれしいものはない。この時私は自分の役割を果たせたのだなと実感した。収穫祭が始まってしまえばもう北門装飾の仕事も終わりである。なんかもの寂しい気さえした。

最後に、最後の最後まで徹夜をして付き合ってくれた松井君、一年生でありながら夜遅くまで頑張ってくれた原野さん、そして、他に手伝ってくれたみなさん、はげましてくれたみなさん、本当にありがとうございました。

第98回収穫祭役員

本部

統一委員長　廣田武司（三年）
副委員長　八木重道（三年）
会計　吉田春昭（三年）

宣伝隊

隊長　横井巌（三年）
副隊長　村田勝巳（一年）
会計　吉田春昭（三年）

前夜祭・特別企画

委員長　保科幸広（三年）
副委員長　井出宗介（一年）
会計　三沢英希（一年）

体育祭

委員長　橋本裕樹（三年）
副委員長　安摩英樹（三年）
会計　廣瀬一茂（三年）

家畜苑

委員長　原川竜也（三年）
副委員長　大石知英（三年）
会計　木村恭子（三年）

北門装飾

委員長　水島正人（三年）
副委員長　松井伸人（三年）
会計　原野幸子（一年）

文化学術展

委員長　松園佳（三年）
副委員長　中野知美（三年）
会計　本多良介（一年）

各研究室の代表者

松園佳　育種（三年）
中野知美　生理（三年）
木内宏行　衛生（三年）
杉山修一　飼養（三年）
武藤利用（三年）
島田聡　繁殖（三年）
吉原幸夫　経営（三年）

第98回収穫祭結果報告

前夜祭・特別企画

総合順位

前夜祭　三位

野外劇　ユーモア賞

先生のど自慢　十位

半澤　恵先生　十二位

飯山先生　九位

学生のど自慢

秋葉夕夏・生方弘子・小野郁子　七位

志賀忠一・松枝秀樹　特別賞

橋本裕樹・松園佳　四位

美人コンテスト　熱演賞　五位

原川竜也　企画賞　三位

ミスター農大

小野田哲夫　特別賞　四位

ミス農大

前田裕子　六位

体育祭

総合順位　五位

農大競馬　八位

玉入れ　五位

米俵レース　五位

先生がんばって　七位

農大健児の意気を見よ　八位

綱引き　三位

教職員対抗リレー　四位

各教科対抗リレー　男子　優勝

〃　女子　四位

1/10マラソン　不明

応援合戦　四位

やぐら装飾　十位

第98回収穫祭畜産学科統一本部決算報告

	予算	決算	差引き（残高）
統一本部	170,000	195,093	△ 25,093
前夜祭・特別企画	40,000	18,633	21,367
体育祭	40,000	43,104	△ 3,104
宣伝隊	30,000	30,659	△ 659
北門装飾	10,000	12,084	△ 2,084
家畜苑	10,000	0	10,000
計	300,000	299,573	427

上記相違ないことを認めます。

第98回収穫祭畜産学科統一本部会計　吉田春昭

平成二年度畜友会会計監査　四年　中井一徳

三年　吉原幸夫

二年　佐々木浩人

一年　牛尼美年子

畜友会だより

平成三年度定期総会報告

平成二年十二月十日、一号館特二教室にて平成三年度畜友会定期総会が開催されました。

総会には、正会員54名が出席。特別会員の先生方にも多数出席していただきました。議長には、家畜衛生学研究室の保科幸広（三年）が選出され、左記の議題が承認されました。

一、平成二年度事業報告及び会計報告
二、平成三年度事業計画及び予算案
三、役員選出

平成三年度畜友会役員名

平成三年度の畜友会定期総会において信任された畜友会役員は、左記の通りで任期は平成四年度の定期総会までとします。

委員長　廣田武司　生理（三年）
副委員長　八木重道　育種（三年）
会計　吉田春昭　生理（三年）
会計補佐　原野幸子　（一年）
渉外　横井厳　衛生（三年）
　　三沢英希　（一年）
　　井出宗介　（一年）
企画　水島正人　経営（三年）
　　安摩英樹　（一年）
書記　木村恭子　飼養（三年）
　　本多良介　（一年）
庶務　重野優　利用（三年）
　　河野正　繁殖（三年）
　　村田勝巳　（一年）

平成三年度　畜友会役員

平成２年度畜友会決算報告

（平成２年12月10日現在）

収入の部	予算	決算	差引残高
前年度繰越金	40,460	40,460	0
（会費収入）		1,298,000	
新入生	1,120,000	1,288,000(8000円×161名)	
		10,000(1000円×1名)	△178,000
編入生・転科生	32,000	24,000(4000円×6名)	△ 8,000
未納会員	316,000	48,000(8000円×6名)	268,000
利息		3,524	3,524
計	1,508,460	1,413,984	△ 94,476

支出の部	予算	決算	差引残高
卒業生送別会費	100,000	97,414	2,586
卒業生記念品費	200,000	206,000	△ 6,000
新入生歓迎会費	100,000	74,867	25,133
「ふじみの」第29号印刷費	400,000	332,000	68,000
球技大会費	50,000	0	50,000
学内スポーツ大会援助費	100,000	90,908	9,092
夏期実習農場紹介費	10,000	23,150	△ 13,150
収穫祭援助費	300,000	299,573	427
総務費	150,000	71,201	78,799
予備費	98,460	0	98,460
計	1,508,460	1,195,113	313,347

※卒業生記念品費・夏期実習農場紹介費は予備費より補充

収入総額　支出総額　次年度繰越金
１，４１３，９８４－１，１９５，１１３＝２１８，８７１

上記相違ないことを認めます。
平成元年度畜友会会計　高野慎哉

平成元年度畜友会会計監査
四年　中井一徳　　三年　吉原幸夫
二年　佐々木浩一　　一年　牛尼美年子

平成２年度畜友会事業報告

１２月２０日	平成二年度畜友会定期総会（於　一号館　特一教室）
３月　１日	会誌「ふじみの」２９号，発刊
３月２０日	卒業祝賀会，卒業生記念品贈呈
４月11，12日	新入生学外オリエンテーションに参加
４月２４日	新入生歓迎会（於　生協食堂グリーン）
５月３０日～６月１６日	第２０回学内スポーツ大会に参加
６月２９日	第２０回学内スポーツ大会慰労会（於　生協食堂グリーン）
８月　６日	収穫祭についての説明会（於　富士畜産農場）
１０月　８日	第９８回収穫祭畜産学科統一本部開き（於　生協食堂グリーン）
１０月３１日～１１月４日	第９８回収穫祭に参加
１１月１３日	第９８回収穫祭慰労会（於　生協食堂グリーン）

第二十回学内スポーツ大会結果報告

総合九位

バレーボール	（男子）	二回戦敗退
	（女子）	準優勝
バスケットボール	（男子）	一回戦敗退
	（女子）	二回戦敗退
バドミントン		一回戦敗退
ハンドボール		四位
ミニサッカー		準優勝
テニス		一回戦敗退
相撲		予選ブロック敗退
剣道		予選ブロック敗退
二十人なわとび		二回戦敗退

平成３年度畜友会事業計画（案）

１２月上旬	平成三年度畜友会定期総会
３月上旬	会誌「ふじみの」発行
３月下旬	卒業祝賀会，卒業生記念品贈呈
４月中旬	新入生学外オリエンテーションに参加
４月下旬	新入生歓迎会
５月下旬	創立１００周年記念収穫祭畜産学科準備委員会発足
６月上旬～中旬	第２１回学内スポーツ大会に参加
６月下旬	第２１回学内スポーツ大会慰労会
８月上旬	収穫祭についての説明会
１０月上旬	創立１００周年記念収穫祭畜産学科統一本部発足
１０月下旬～１１月上旬	創立１００周年記念収穫祭に参加
１１月中旬	創立１００周年記念収穫祭慰労会

上記が畜友会の今年の活動です。会員の方々の積極的な参加をおまちしています。

東京農業大学畜産学科
〝畜友会〟規約

第一章　総則

第一条　本会は東京農業大学畜友会と称す

第二条　本会は東京農業大学在学生、教職員、及び卒業生をもって、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。

第三条　本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。

第二章　会員

第四条　本会の会員は左記の三種をもって組織する。

一、正会員

二、特別会員

三、名誉会員

正会員は東京農業大学畜産学科在学生、特別会員は東京農業大学畜産学科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委嘱により承認を得たもの。

第五条　会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

第三章　役員及び機関

第六条　一、本会は、役員、クラス委員、及び監査をおく。

二、役員は委員長一名、副委員長三名、書記二名、会計一名、会計補佐二名、渉外四名、企画四名、庶務四名とする。

第七条　本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。

第八条　一、第六条第一項の役員は、畜産学科各研究室の三年次生より一ないし二名の候補者を選出する。

二、クラス委員は、一、二年次生より若干名選出する。三年次生は、各研究室より一名ずつ選出する。

三、(1)役員の学年は、委員長にあたっては三年次生とし、副委員長三名のうち三年次生二名、二年次生一名、会計は三年次生とする。

(2)委員長不在の場合は、副委員長が代行するものとする。

四、第六条第一項の監査員四名は各学年一名ずつ選出する。

五、第六条第一項のクラス委員は原則として五月に選出し、役員会の承認を得た後、直に公示する。

六、役員及び監査は定期総会において信任を得るものとする。

七、欠員が生じた場合、速やかに補充しなければならない。

但し、補充役員については、委員長が推薦し役員会において信任を得るものとする。

第九条　役員の任期は原則として一年とする。

第十条　総会は正会員より構成され、本会の最高決議機関とする。

第十一条　一、総会は正会員の三分の一以上より成立する。

二、委任状は署名捺印（拇印を含む）を必要とし、議長に一任する。

三、委任状は総会に際し定足数に含まれる。

但し、委任状は議長委任とし、正会員総数の四分の一までとする。

四、委任状の検査は役員が行なう。

第十二条　定期総会は年一回十二月に招集する。

臨時総会は左記に該当した場合一ヶ月以内に召集しなければならない。

一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長に提出あるとき。

二、役員の三分の二以上が必要と認めたとき。

第十三条　定期総会に於いて次の事項を審議決定する。

(1)前年度の事業報告
(2)前年度の会計報告
(3)役員の改選
(4)当該年度の事業報告
(5)当該年度の予算案
(6)その他

第十四条　総会の開催は五日前に公示しなければならない。

第十五条　総会における議長は、総会においてその都度互選する。必要に応じて議長は副議長を指名する。

第十六条　総会の議決は、出席者の過半数によって議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第十七条　総会出席者の過半数により役員の不信任を可決できる。

第四章　業　務

第十八条　第六条第一項、第二項に定められた役員は本会の最高執行機関たる役員会を構成する。

この役員会の召集は、委員長が行う。

第十九条　本会の事業年度及び会計年度は十二月一日より翌年十一月末日までとする。

第二十条　本会は左記の業務を行う。

一、会員親睦会
二、講習会及び研究発表会
三、見学調査
四、機関紙の発行
五、その他第二条に附帯する業務

第五章　会　計

第二十一条　会費は年間二〇〇〇円とする。その納入は四年分一括し、入学時に納入のこと。

第二十二条　本会の運営は会員の納入する会費で運営する。但し第十九条の業務執行にあたり臨時徴収する場合もある。寄附行為は認める。

第二十三条　納入金の払い戻しは行わない。

但し入学取消しの場合はその限りではない。

第六章　監　査

第二十四条　本会の業務を円滑、正常化する為監査委員をおく。

第二十五条　監査委員は、前条の目的達成の為、年度末に会計監査を行なう。

監査は監査委員が必要と認めれば随時できる。

第二十六条　監査委員は第六条第一項、第二項の役員の兼任は出来ない。

第七章　附　則

第二十七条　本規定解釈の講義は、役員会において、最終的解釈する。

第二十八条　本規定の改正、及び追加は総会においておこなう。

第二十九条　一、本規定は、昭和三十五年六月二十九日より施行する。

二、本規定は、平成元年七月七日、一部改定

編集部では〝ふじみの〟第三十一号の原稿を募集致しております。より一層充実したものとする為にも、名誉会員、特別会員、学生多数の御協力をお願いします。

記

募集期間　平成三年六月～平成四年一月下旬
要　項　○論文、随筆、紀行文、主張
四〇〇字詰～十枚以内
○写真カット、は随意
宛　名　東京都世田谷区桜丘一－一－一
東京農業大学畜産学科内
畜　友　会
ふじみの編集委員会行
発行日　平成四年四月予定
応募原稿は一切お返し致しません。

畜友会〝ふじみの〟編集委員会
TEL（三四二〇）二二二二㈹

編集後記

「ふじみの」も今回で記念すべき30号を発刊できました。30号までの「ふじみの」の一冊一冊、一ページ一ページが、決して言葉では表わせないすばらしい歴史だと思います。

これからも一冊一冊、一ページ一ページを大切にして、40号、50号をめざし作っていってくれることを後輩達に期待して編集後記と致します。

最後になりましたが、忙しい中、原稿を書いていただいた先生方、ならびに会員の方々に厚く御礼申し上げます。

編集委員一同

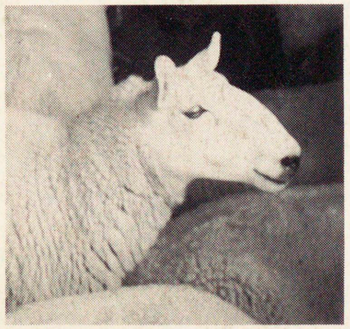
平成3年3月1日　発行

“ふじみの”第30号

編集責任者　渡邊誠喜
編集長　広田武司
発行者　畜友会

発行所　東京都世田谷区桜丘1−1−1
東京農業大学畜友会
電話（3420）2131（呼）

印刷所　東京都世田谷区経堂1-6-13
エルデ・タイプ社
電話（3429）1067



1991